



留学中の山下岩吉

山下岩吉の研究

幕末の幕府オランダ留学生
(高見島出身)

西山保



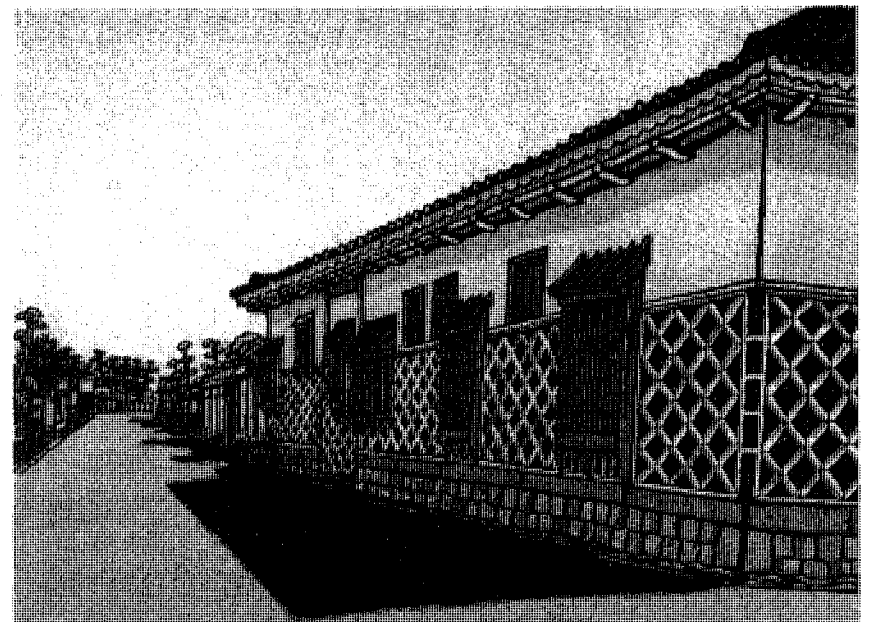
瀬居島の吉川庄八



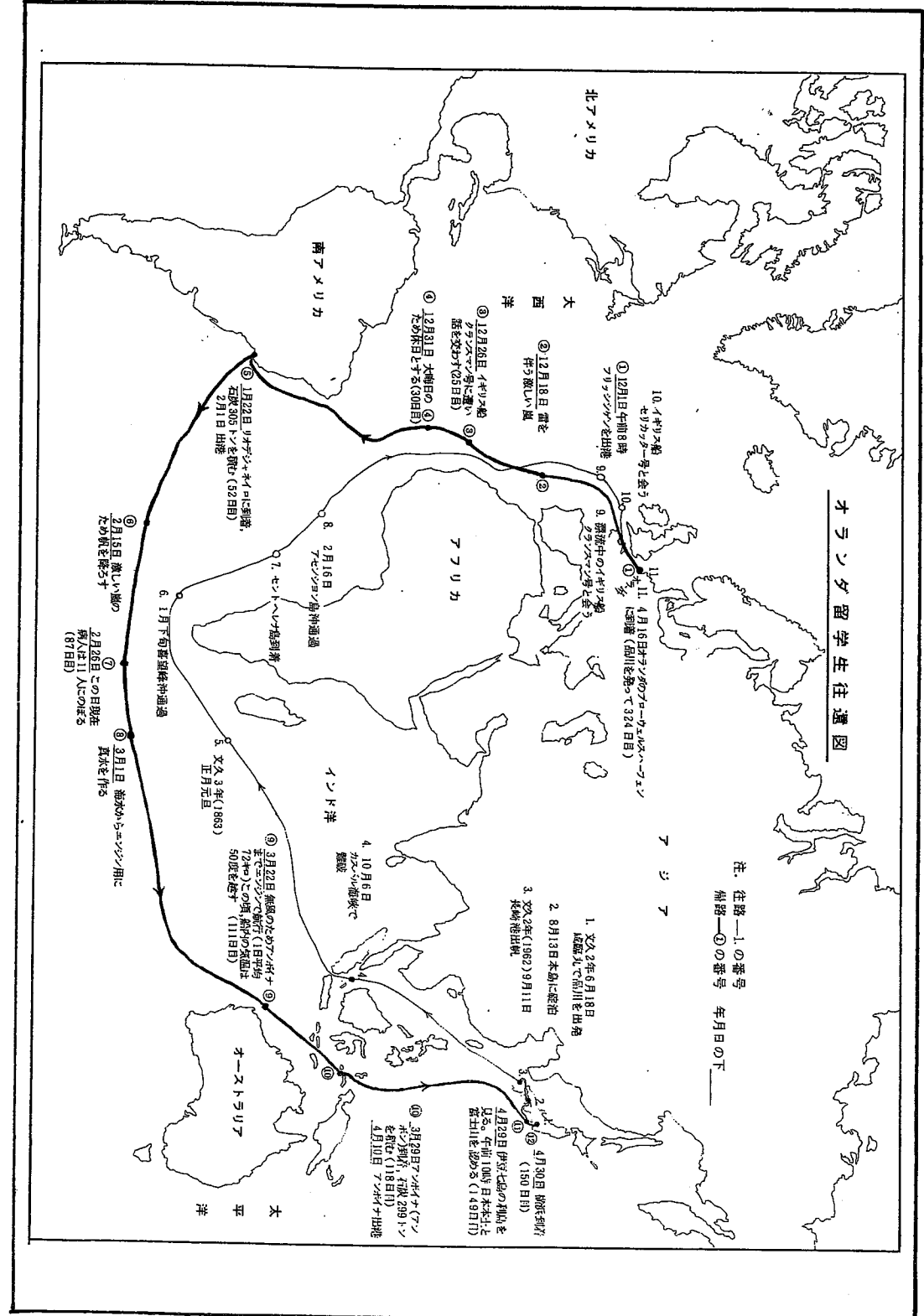
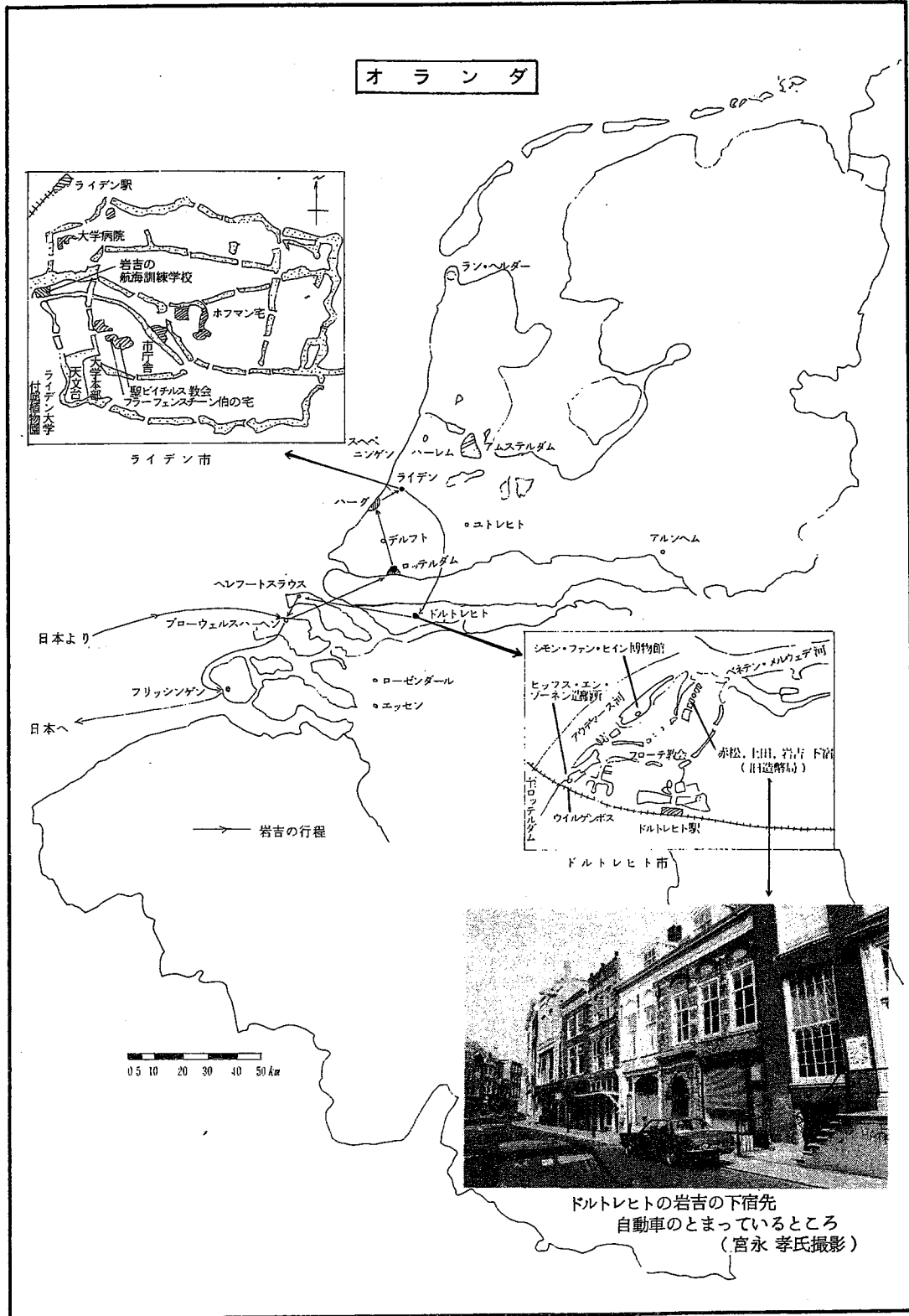
晩年の山下岩吉



協会報第 25 号
1984



多度津町文化財保護協会



はじめに

高見島の山下岩吉は、幕末の激動期に幕府がヨーロッパの近代文化や科学・技術を修得させるためにオランダに派遣された十五名の留学生の中の一人であり、これはわが国が留学生として海外に派遣された最初の一人でもあります。

山下岩吉は、高見島一五三番の第一（現在の山下三郎氏宅）の山下新造とヨシとの間（系図参照）に天保十二年（一八四一）一月二十五日に生れた。わが高見島出身の山下岩吉の業績について簡単に述べて見たいと思います。

岩吉の生れた時代

寛政四年（一七九二）ロシアの使節ラックスマンが根室に来て通商を求めたのは、文化元年（一八〇四）同じレザノフが長崎に、さらに文化八年（一八一）には、ロシアの軍艦が国後島にきて艦長ゴロニンらが上陸するという事件が起きた。他方文化五年（一八〇八）には、イギリス軍艦フェートン号がオランダ船を追って長崎に入港して、幕府を驚かせた。この状況に対して幕府は文化八年（一八二五）外国船打払令を出し、鎖国海防を固執した。

幕府がこうした鎖国海防の限界を知ったの

は、アヘン戦争で清軍が敗れ、天保十一年（一八四一）一月の岩吉が生れた月には、川鼻の仮条約で香港を獲得した条約を結んだ月である。この為攘夷論は後退し、翌天保十二年（一八四二）同打払令が取りやめられた。その日本をさらに愕然とさせたのがペリー艦隊の来航であった。ペリーは米国印度艦隊司令長官であったが、大統領の国書を携え嘉永六年（一八五三）軍艦四隻を率いて浦賀に入港し開国を要求した。岩吉の十二才の時である。一年後ペリー品川沖に現れ、国書に対する回答を迫り、遂に日米和親条約を認めさせた。これは直ちにイギリス・ロシア・オランダ・フランスに及び、これで二〇〇年以上続いた鎖国に終止符が打たれた。

安政二年（一八五五）オランダ政府はスー

ムピング号をオランダ国王の名において幕府に贈呈した。同船はその名を観光丸と改められ、これが近代海軍の第一艦となった。

幕府はこれを機に同年長崎に海軍伝習所を開設し、観光丸を練習船にあてるとともに同船乗組みのオランダ海軍大尉ベルス・ライケン以下二二名を教師とし、わが方は永井尚志を伝習所長に勝海舟らをその補佐に任命した。永井は塩飽から三十人の水夫を出し、それで不足の場合には長崎など地元で補充したが主体は塩飽出身の水夫であった。

伝習所に薩摩藩から献上した昌平丸に乗込

んだ塩飽の水夫十五名の名前は明らかであるが、残り十五名の名はわからない。残り十五名の中に岩吉がいたかどうかはわからない。岩吉の当時の年令は十五才であるので、一寸と若すぎるの感がある。

三崎ユキ氏（岩吉の孫娘）の話によれば、十七才から島を出て行ったそうである。第一期の伝習生は安政四年（一八五七）三月業を終えて観光丸で江戸へ帰った。

八月五日にオランダから購入した軍艦ヤツパン号が到着した。これを威臨丸と命名して新たに練習艦とし、木村嘉毅が二代目の伝習所長となり九月に江戸から内田恒次郎・赤松大三郎（オランダ留学生のメンバー）ら第二期生が到着して伝習を始めた。この時も塩飽の練達の水夫が選抜せられて乗り込んだ。岩吉の孫娘三崎ユキさんの「じいさんは十七才の時に出て行った」と符合する。

岩吉が文献史料に名前が出て来るのは、小笠原島開拓の御用水夫としてである。

文久元年（一八六一）外国奉行水野筑後守忠徳を遣わして調査を着手し、また八丈島から島民を移住せしめて開墾することを計画した。

この外国奉行一行の調査団が渡航した船は、アメリカ渡航で有名な威臨丸と朝陽丸・食料輸送船の千秋丸であった。

岩吉の乗船した船は軍艦朝陽丸であった。

朝陽丸には軍艦頭取矢田堀景蔵以下が乗り組み、文久二年（一八六一）三月九日伊豆三子浦を出帆し、八丈島に寄港し男女十五名計三十名を募集し、同月十七日父島に入港した。一週間島に滞在して調査し、二十四日同島を出帆して四月十一日品川に帰った。岩吉が二十一才の時であった。

五人の留学生をオランダに派遣することにした。文久二年（一八六一）三月十三日、留学生一同は幕命を軍艦操練所と呼ばれ、軍艦奉行井上信濃守より次のような命を受けた。

「先般亜米利加国政府え蒸気軍艦御詔相成右製造中諸術研究として被差遣候旨被仰渡、夫々支度相整い候儀之所、亜国政府之差支有之、急速其運びに不至候に付、今般改て右軍艦和蘭国政府之御詔相成、依て役々の者も同国へ可相越候」

江戸でこのオランダ行の命を受けた者は、次の七名で年令と修める学問と技術を次に挙げる

- 軍艦組 内田恒次郎（正雄）……（二十五才海軍諸術）
- 榎本釜次郎（武揚）……（二十七才 機関学）
- 沢太郎左衛門（貞説）……（二十八才 砲術）
- 赤松大三郎（則良）……（二十二才 造船学）
- 田口俊平（良直）……（四十五才 測量術）

これら五名はいずれも軍艦操練所の出身であり、さらに藩書（洋書）調所より

- 津田真一郎（真道）……（三十四才、法律・国際法・財政学・統計学）



団長 内田恒次郎

西 周助（周）……（三十四才 同上）

の二名が加わった。津田は津田梅子（津田女塾大学創設者）の父である。

外に長崎養生所でオランダ医ポンベ・ファン・メーデルフォールト（Pompe van Meerdervoort）について医学の修業中

- 伊東玄伯（方成）……（三十一才）
- 林 研海（紀）……（十九才）

以上九名は士分であった。又「職方」と呼ばれる技術者たち六名がオランダに行くことになったが、これは「士分だけでは実地の方面に学ぶに不都合であろう」といった配慮から一行に加えることにした。これは次の人々である。

- 水夫小頭 古川庄八……（二十八才 操航・操砲・製帆学）
- 一等水夫 山下岩吉……（二十一才 同右）

鑄物師 中島兼吉……(三十四才
大砲の鑄造)

時計師 大野弥三郎(規周)……
(四十三才測量機械の製造)

船大工 上田虎吉(寅吉)……
(四十才造船術)

鍛冶職 大河喜太郎……
(三十一才鍛冶術)

一行十五名中岩吉は林研海について若かった。

○江戸より長崎へ

文久二年(一八六二)六月十八日

留学生一行は、この日威臨丸で品川沖を出帆一路長崎へと向った。ちょうど同じ日に、小笠原開拓のために出港しようとする朝陽丸や荷物船の出帆準備に追われていた。二ヶ月前まで乗っていた朝陽丸の姿を見た岩吉の心は感無量であったと思う。途中いろいろと船の事故や麻疹の流行で大変遅れた。

八月十三日午後九時に塩飽本島に碇泊した。この島に寄ったのは威臨丸の乗組員に同島の出身者が多かったという外に職方の山下岩吉が高見島であり、また古川庄八も塩飽瀬居島の出身であったところから、二人の家族や親類の者たちにとまごいをさせるためであった。

西周助の紀行の中に「威臨丸のいたるや島民は端艇に乗りて群がり来たり母は子を認め

妻は夫を認めて歓呼相應えず、その喜び知るべし」と書かれている。
士分の者たちは勤番所にあいさつに出かけたのみ、名主岡崎藤左衛門(与島の出身)方に招かれ、入浴のあと酒肴のもてなしを受けて同所で一泊した。

翌十四日二時半同島を出帆、以後下関福浦・平戸の田助浦に寄港し、八月二十三日長崎に入港した。

文久二年(一八六二)九月十一日、オランダ船カリッブス号で長崎を出港した十五名はまず蘭領東インド(現インドネシア)のバタビア(現ジャカルタ)に向かった。当時オランダへの渡航は一度バタビアに渡り、そこから定期便のオランダ船に乗り換えていた。一行の乗った船は到着前にインドネシアのパンカ島とビリトン島の間のガスバル海峡で遭難してカリッブス号は沈没、このため日本から持って来た積荷の五分の一を失ったが、一行全員救助されてようやくバタビアに上陸することができた。時は十月十八日の朝であった。

十一月二日オランダ船テルナテ(フリゲート艦)に乗船、バタビアを出帆、未だスエズ運河が開通していない時であったので、アフリカ南端喜望峯をまわって大西洋に出、セントヘレナ島に立ちよってナポレオン一世の遺跡を訪ねる。
その時の感激を榎本武揚は次のような漢詩

をつくっている。

去載の深秋陽を發す
路程十有五旬強
春風喚び醒す往時の夢
吹き向う列翁幽死の場



榎本武揚(釜次郎)

文久三年四月十六日陽曆一八六三年六月二日)オランダのプロウウェルスハーフェン港に入港した。品川を発ってから三二四日の大航海であった。

2 岩吉のオランダの生活

オランダに到着した日本留学生は、これより Japansche Detachment in te Nederlanden (在蘭日本派遣隊)と称することになった。一行はオランダ政府から世話を命じられたライデン大学の初代日本語教授 Hoffman 氏 (J. J. Hoffman) の案内でまずライデンへ赴いた。ライデンにしばらく滞在したのち、一行よりも一足先に帰国していた軍医ポンベ (Pompe van Meerdervoort) のす

すめもあって津田・西田の二人は、ライデン大学のフィッセルング教授 (S. Vissering) のもとで国際法・財政学・統計学を学んだ。岩吉を含む六名の職方もライデンに残った。職方一同は、オランダ語や数学を学ぶことになった。職方たちはオランダに渡るまでは、とくにオランダ語を学んだ経験はなかったと思われるが、ことによると航海中、A・B・Cの読み方ぐらいいは学んだらうか。確たる史料がないからなんともいえないと宮永先生はいつている。ホッマン博士よりオランダ語の手ほどきを受け、その後専門とする実務を修業をしたようである。総じて士分の者たちは十分にはいえないまでも読み書きの素養はあったようである。

職方の山下岩吉と古川庄八は、文久三年(一八六三)六月二十五日よりライデン航海訓練学校 (Zweeweekschool voor Zeevaart) (地図ライデン市参照)で授業を受けた。二人は寄宿舎に入れられオランダ人と同じ扱いを受けたが、風俗・習慣・言語の異なる世界に放り出され、とまごいを感じたことが多かった。何よりも孤独に耐えられず、数日後には下宿からの通学を願ひ出て、こんどは通学生となった。二人は一人前の水夫として必要な教育を受けたと思われる。オランダ語の知識に乏しかったから講義そのものはよく理解できなかったろうが、操航訓練や操砲といった実地

操練にはついていけたにちがいない。

古川と山下がどのくらいの期間、この学校に学んだものやらわからない。同校の「沿革史」も日本人留学生に何も言及していない。しかし赤松の「在蘭日誌」には、文久三年の夏から秋にかけて、古川・山下二人はオランダ軍艦ゼーランド号に乗り組んで、南米から喜望峯・紅海の方へいこの為に出張した。といった記述があり、二人は遠洋航海の実地操練を受けたことがわかる。ゼーランド号は一八五九年に建造され、砲五十六門を装備したオランダ海軍の初の蒸気軍艦(フリゲート艦)であった。実際一八六三年には地中海や南米の方まで航海したことが「ゼーランド号沿革史」によって知ることが出来る。尚この年は長州藩が英米仏蘭船に対して砲撃したので山下・古川は日本人の立場として非常に困ったそうである。

職方大河喜太郎が突如アムステルダムの下宿で病死したが、彼の葬儀には航海訓練中であったので出席していない。以上宮永孝氏の現地の調査によってわかったのであるが、尚ライデンの航海訓練学校の建物も今も残っているが(ライデン市の地図参照)一八七八年十月に造られたものであるから古川と山下が入学した当時のものでない。一八六〇年代のライデンの地図によると現在の敷地に兵営があったことがわかる。

日も重ねるにつれてオランダ語も徐々に上達し、簡単な日常会話も不自由しなくなった。しかし留学生の一行が日本を発つとき、幕府の出した誓詞の中に「オランダ滞在中は、宗門はもろん衣服等西洋風になじまざるようきと心得べし」の一項があるため、着物は羽織・袴・帯刀(大小)草履ばきで、ほかに菅笠、頭布、麻上下、唐傘、提灯まで持参した。

日本式の服装、結髪は人目を引くうえに諸事不便であるためカッテンディケ海軍大臣より「諸氏が日本を発たれたとき、お国ふうを守るという誓いがあったことは、わたしも聞いて知っているが、オランダにいる間は、わが国の風俗に準ぜられてはいかがでしょう」と懇切なる忠告があった。

オランダへ到着してから間もなく写したと思われる写真には、士分の人達はいずれも髪を結び(なかには髪をうしろに櫛けずり、簡単に結びまるめて前から見ると断髪であるか



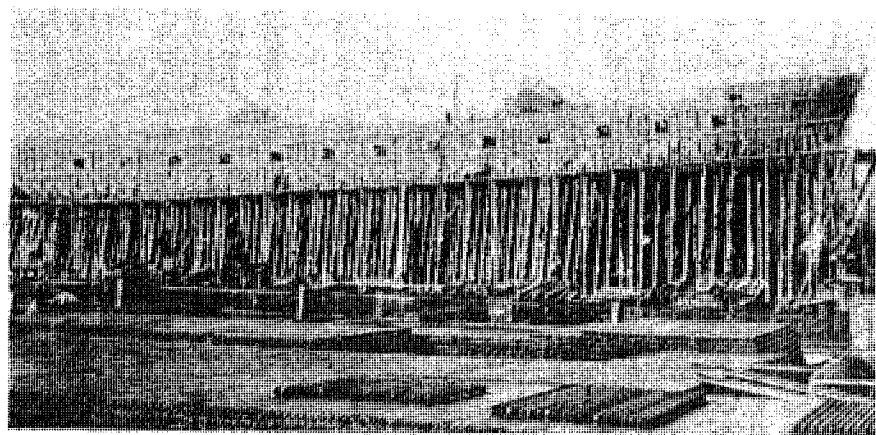
オランダの岩吉のスタイル

のようにしていたものもいた。) 帯刀、羽織、袴の姿で写っている。しかし高見出身の山下岩吉の写真には、折襟、蝶ネクタイに腰ざり半てんのような上衣を着、モンペをうがち、紺足袋、高足駄をはき、傘をひろげて肩にかついでいるという奇妙な姿で写している。幕府がオランダに依頼した軍艦開陽丸の工程もドルトレヒトにおいて着実に進行し、岩吉も文久三年十月二十一日赤松に率いられて古川、上田と共にドルトレヒトへ移り開陽丸

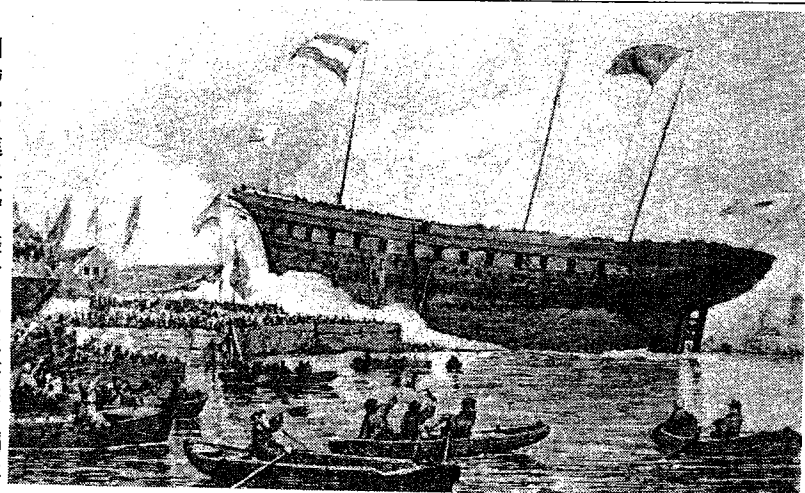


岩吉のドルトレヒトの下宿先(門を入ったところ 宮永孝氏撮影)

の造船にたずさわった。竜骨を据えつけてから約二年後の慶応元年九月十四日(一八六五年十一月二十日)ようやく進水式を行うまでになった。



建造中の開陽丸(建造開始後、約1年目)



現地の雑誌に掲載された進水式の模様(木版画)

開陽丸の進水式の様子は宮永孝氏の調査によると、当時の新聞、雑誌にも取り上げられた一事をもってしてもオランダ人の関心がいかに大きかったかがわかる。開陽丸はウィルゲンボス(Wilgenbos)のヒツピス造船所工場で進水を待っている。この日、海軍大臣カッテンゲイケをはじめ、オランダ貿易会社の

重役やオランダ海軍の士官たちが立ち会い、日本側からは内田、榎本、沢、赤松、田口の士分者五名、古川・上田・山下岩吉の職方三名が列席した。

午後四時ごろ「おろせ」の命令が出されるや艦は水の中を滑り出した。このときどくと大きな歓声があがった。

当時の模様を伝えるオランダ新聞には、「この荘厳な光景を見んとて幾千の観衆は同市に押しかけた。ドルトレヒト市民の暇ある者で、家に留っていた者は一人もいなかった。おもだった来賓は美しく飾られた見物席に座を占めた。そこには幾多のドルトレヒト(ドルトレヒト市地図参照)の選りすぐりの人々のほかに、海軍大臣、オランダ貿易会社の代表者、オランダ海軍の有力者および数名の日本士官も見受けられた。艦が堂々と架台からすべって水煙を正て美しいメルウエデ河に浮かび上がったときにどっと歓声があがった。その歓声はオランダがまたもや技術方面における戦に勝利を博したことがわかると同時に多数の者に一種の誇りを覚えさせた造船者が当然受けるべき讚美の叫びであったのである……」と述べている。

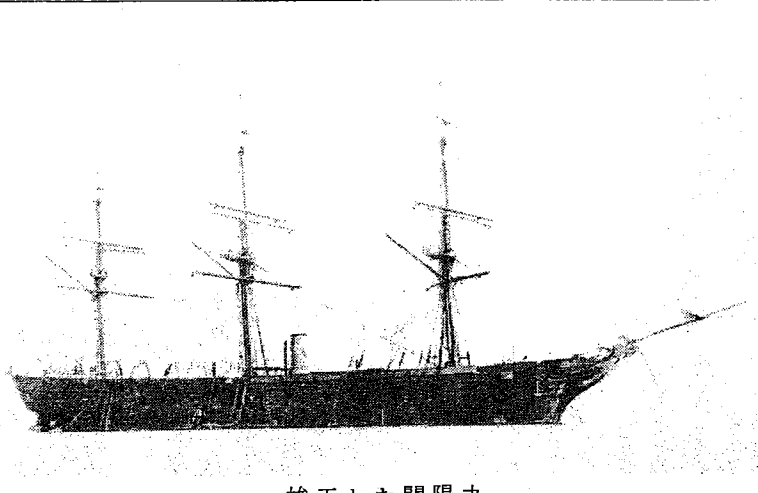
進水式が終りて、オランダ貿易会社の主催により、クラブ「デ・ハルモニー」で晩餐会が行なわれた。席上、日蘭間のよい友好関係をたたえて杯があげられた。オランダ貿易会

社の社長が日本の将軍の健康を祝して乾杯の音頭をとり日本の留学生の団長内田がオランダ国王の健康に答礼の乾杯をした。

ヒツピス造船所にはこの仕事がとどこおりなく終了したことを記念して、日本の海軍士官へオランダ貿易会社から銀製の記念品が贈られた。市の警備隊の音楽隊はセレナーデを演奏してパーティに花をそえた。これはドルトレヒト市が今日の重大なできごとに対する関心を示すものである。面白いことに当日のメニューがわかっている。岩吉もこの美味に舌づつみをうったことでしょう。その中味を紹介すると次の通りである。

「生がき・英国風ポターージュ・魚・パリ風小型パイ・コロッケ入りシチュー・バイヨン風牛ヒレ・野菜・フィナンシエール風子牛の頭・しぎときのご・プディング・ラムソース・野鹿肉のソース漬け・すぐりソース・松露入りの七面鳥・山しぎ・キジ・大雷鳥・伊勢エビ・マヨネーズソース・ペリゴールの松露入りゼリー・やまうずらのひなの蒸し肉・パニラのババロア・ヌガー(菓子)・冷やしたポンス・デコレーションケーキ・三色アイスクリーム等々」

この外に年代もののぶどう酒がふんだんに出された。開陽丸は進水式を終えて約二週間後の慶応元年九月二十六日二十七日(一八六五年十一



竣工した開陽丸

月十四・十五日)二隻のタグボートにゆっくと曳かれて、ドルトレヒトからヘレフートスラウスへ向った。ここにある海軍工廠で艦装の一部を行うためである。

十二月二十九日、同艦はドルトレヒトに戻ったが、メルウエデ河は水深が浅いといって難問をかかえていたので南十二キロ行ったウイ

ルムドルプで残りの機装を行うことにした。古川と山下はライデンよりドルトレヒトに移り、開陽丸の機装の仕事を手伝うことに従事したがあとで同艦と共にフリシゲンに移動した。

開陽丸は建造に着手されて以来約三年ぶりで竣工したが、次に同艦の概要について述べてみよう。

- 船型……バーク型・三本マスト・補助エンジン付
- 排水量……二五九〇トン
- 最大長……七二・八〇メートル
- 最大幅……一三・〇八メートル
- 吃水深……五・七〇メートル(前部)
- 六・〇四メートル(後部)
- 補助エンジン……四〇〇馬力蒸気機関一基
- 速度……一二ノット
- 備砲……三五門
- 乗船数……三五〇人〜五〇〇人
- 設計者……J・W・L・ファン・オールト
- 造船所……ドルトレヒト・ヒツプス・エン・ゾーネン造船会社

開陽丸はすべての機装を終え試運転を何度かやったのち、慶応二年十月二十五日(一八六六年十二月一日)土曜日の朝八時フリシゲンを抜錨し、日本への回航の旅に出発した。開陽丸には榎本武揚の師ディノール海軍大尉

を艦長とし、一等航海士J・ウィットップ・コニングや一等機関士G・B・ハルデスなどの士官二名・下士官十四名・オランダ人・イギリス人・インド人からなる水夫百九名の乗組員のほか、内田・榎本・沢・田口・上田・古川・山下・大野・中島ら九名の日本人が乗り組んでいた。伊東・林・赤松の三人だけが残った。フリシゲンを出発して五十二日後の一月二十二日、艦はリオデジャネイロ港についた。そこを二月一日に出港、当時の蘭領東インドのアンボイナ(Amboina)別名アンボン(Ambon)二月二十五日に投錨し、十二日後食料や水を積んで出港し一路日本に向った。四月二十九日、伊豆七島が目に入った。午前十時、はるかかなたに白雪をいただいた富士山を望見したとき、一同のよろこびはたえようもなかった。誰ももなく熱い涙が思わずほとばしり出て頬を伝った。

五月一日ようやくにして横浜に到着した。オランダのフリシゲンを出発して、実に百五十一日目であった。

五月九日、日本の海軍奉行が蒸気船に乗って開陽丸を訪れた。ディノール艦長の寄港日誌の最後のページを見ると、幕府への引き渡し式の華やかな様子が描かれている。

「一八六七年六月二十二日 土曜日 異常なし。外板は磨く。八時、国旗及び艦首旗掲揚、十時、日本人乗組員、荷物を持つて来艦。十二時、オランダ総領事、政府代表、オランダ領事兼オランダ貿易会社駐在員、領事館事務局長が乗艦する。続いて日本人高官数人が乗艦。総領事のあいさつに対して、日本の海軍奉行より答礼あり。二十一発の礼砲をもって日本国旗に敬意を表した後、オランダ国旗が静かに降ろされる……」

五月二十日(一八六七年六月二十二日)正式に海軍奉行並織田対馬守、海軍奉行勝安房守(海舟)同木村兵庫頭らは横浜に赴き、オランダ公使ドテガラ、ファン・ポルスブルクとの間の引き渡し式を終えた。

これによってオランダ留学生の一大任務は終了した。殊に赤松・古川・山下らは開陽丸の造船に直接かかわっただけに心中感無量だったと思います。ところで帰国後の留学生九名の足どりだが、この点に関しては記録少なく不明な点が多いが、帰朝報告を早々にすませて各自思い思いの場所へ肉親が待つ家が勇んで帰って行ったことであろう。

帰国して山下岩吉が驚いたのは、予想はしていたものの、わずか数年の間に幕府や社会形勢に大きな変化がみられたことである。

即ち文久以来、薩摩・長州の台頭が目ざましくなったばかりか、志士の活動や尊王攘夷論の沸騰などによって、幕府も政権を維持してゆくことがますますむずかしくなっていた。その難局を打開するために、いっそ大政を奉

還し、公議にもとづき挙国一致内閣をつくって事に当たった方が賢明であるといった意見も出た。越前藩主松永慶永などは大政奉還を説いた一人であった。ついで慶応三年十月十四日、將軍慶喜は大政奉還の奏上せしめ、ここにおいて二百六十年の長きにわたって覇業を成しとげた幕府政治は事実上の終止符をうつことになった。

岩吉の維新時の生活についてはわからないことが多い。彼についての史料は全然無いにひとしい。古老達の話を総合してみると、鳥羽・伏見の戦に始まる戊辰戦争の時には身の危険を感じて高見島で身をかくしていたようである。

明治四年(一八七二)新政府によって横須賀造船所が開設され、岩吉も同年一月二十四日付をもって、海船方から海軍教授所二等教授に任命されている。

明治十五年官名が一等士長となっており、明治十九年製帆工場長の職を兼ねていた。明治二十三年六月五日職を辞して一時、千葉県木更津町木更津千三百九十三番地で妻ミツと女中多川と余生を送っていたが、妻ミツと明治三十一年五月十五日に死別、高見島に帰郷後愛孫娘三崎ユキさんが生れている。三崎ユキさんは現在八十六才である。

高見島での生活

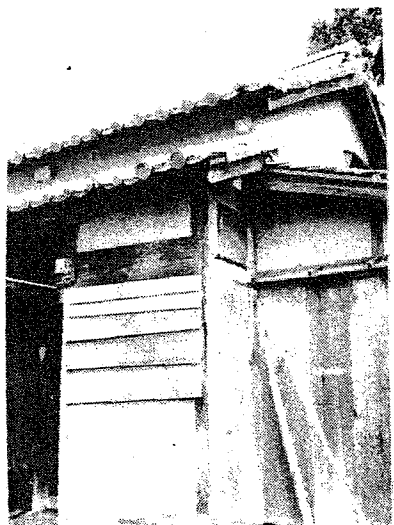
(孫娘 三崎ユキさんの話)

(どこで生れて、どこでなくなったのですか) 「新兵衛家(山下三郎氏宅)で生れて仁兵衛家(三崎ユキさん宅)でなくなった」

(いつ高見に帰ってこられましたか) 「明治三十一年五月十五日に義理の祖母ミツが死没、ミツの遺言「どうか息子の世話になって、



新兵衛家



仁兵衛家

余生を送って欲しい」との事で高見に帰郷した。息子の代吉は大阪で大工をしていた。私(ユキさん)と祖父と後妻のタカとが高見で生活を共にした。私が祖父と生活を共にしたのは二十年間であった。

(先妻ミツさんとの関係は……) 「祖父の妻ミツさんと結婚したのは、祖父(岩吉)十七才、ミツさんは十三才、ミツさん宅は江戸日本橋の旅籠経営の親戚の西田半助の娘であった。二人の間には娘タカが生れたが、明治十八年になくなった」

(岩吉はどんな人でしたか) 「祖父は五尺七寸(一七五糎)位の背の高い人で、余り口数は少ないし、酒は好きであったが、酒を飲むのを見たことがない。自制心の強い人であった。」

祖父の恩給により生活をしていたので、当時の高見ではぜいたくな生活をしていた。本箱には外国の本ばかりで一杯あったが、祖父が死んでから一冊もなくなった。本箱だけは高見にある」

（オランダの話聞いた事ありますか）
「非常に無口であって、声も高く言わなかった。オランダ留学の話聞いたことはない。聞いたかも知れないが、忘れたかも知れない。自分から進んで話をすることはなかった」

（どんな生活をしていましたか）
「唐臼で玄米をよくついていました。執盛や真実の歌（義太夫）を歌いながら畑の手伝いもよくしていた。後妻のタカさんは少しわがままな所があったが、大変やさしく思いやりのある祖父であった事が印象に残っている。」

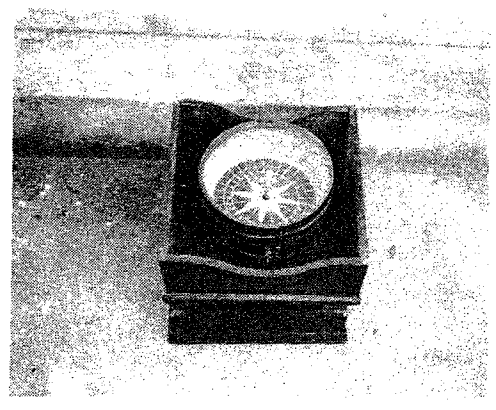
当時、高見島ではどの家でも麦ご飯を食べていたが、私には麦ご飯を食べさせなかった。祖父は私を大事にしてくれて毎日学校へ迎えに来てくれた。島には店が一軒もなかった。で、多度津へ買い物に行っていた。当時は櫓こぎで片道二時間かかっていた。祖父が全部していた。祖父は早寝早起きで、常に着物を着用して服や山高帽子を着用するのは進水式の時であったそう。

島で口ひげをはやしていたのは、祖父と村長だけであった」

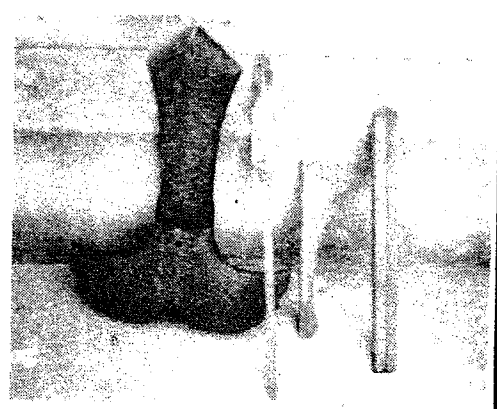
（何の病気でなくなったのですか）

「祖父の病気は老病で寝込んだのは二十日位で医者に見てもらった時は、どんなに苦しくても、じっと正座して礼儀正しく見てもらった。私が六月十三日佐柳の犬天狗に参って占をしてもらったら結果が余りよくないので家に帰って泣いていたところ「ユキよ、どうして泣いているのか」と聞いた。それからぐっと弱まって、十三日後の六月二十六日なくなった」

（遺品は何かありませんか）
「船の羅針盤・刀・槍・さしなど残っています。日記もありましたが、戦時中焼いてしまいました」



羅針盤



槍・のぎす・さし

幕府の激動時代、この瀬戸内海の一小島である高見から、幕府に選ばれた留学生十五人の中の一名であり、しかも士分としてでなく、国民の多数を占める職方の代表として行ったところが意味が深いと考えます。

薩摩藩英国留学生のように帰朝後新政府により好遇されなかったのは藩閥政府にとってはやむを得なかったと思います。

尚、岩吉らが乗って帰った一級軍艦開場丸は戊辰戦争の時、明治元年十一月十五日北海道江差攻略の陸兵を援護するため、江差沖で砲撃、同日夜半、悪天候のため座礁、あらゆる手を施しましたが十数日後に沈没しました。拙文を書くにあたってご指示ご援助を頂いた

あとがき

白川武先生、出浜二三夫氏に感謝致しますと共に法政大学の宮永孝先生のご協力を得て、この稿を書くことが出来ました。

尚、岩吉の孫娘三崎ユキさんをはじめ高見塩飽大学の老人会の皆様のご協力に対して厚く感謝を申し上げます。

岩吉の研究には資料不足で、まだ完成していませんが新資料を見つけてご教示頂ければ幸いです。

○ 山下岩吉履歴

本籍 神奈川県三浦郡横須賀町汐留第七十二号

姓 名 山下 岩 吉
 出生地 讃岐国塩飽高見島一五三一番の第一
 生年月日 天保十二年正月二十五日生
 族籍名 士族

奉職履歴

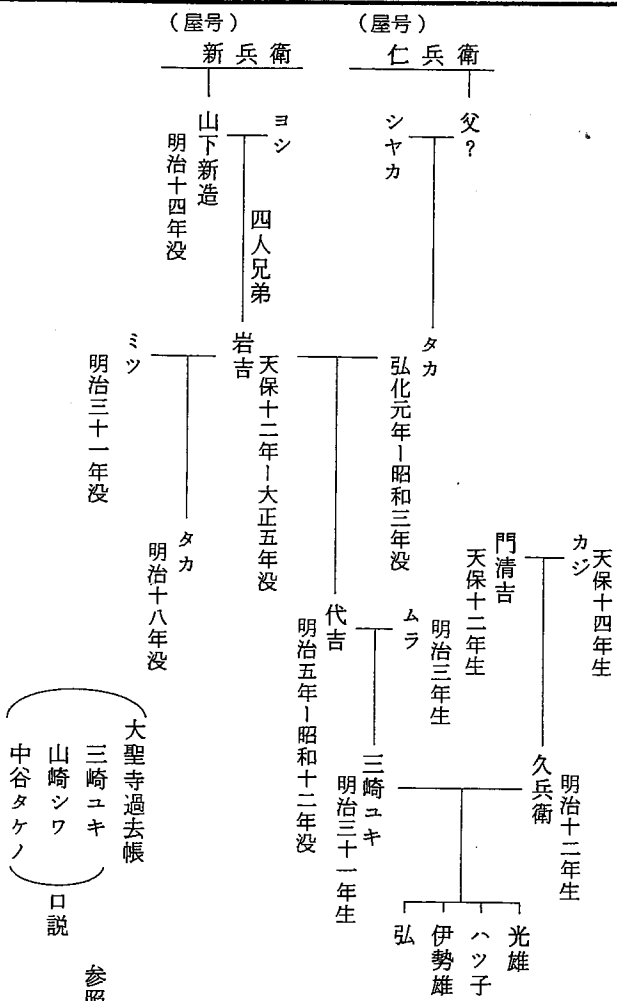
明治 四年 一月三十日	海軍教授所二等教授	海船方
明治 五年 一月	右分課可相勤候事	
明治 五年 一月	五等之同給殿下候事	造船方
明治 五年 一月	付属申付候事 製造掛	同
明治 五年 六月 十日	三級三月給被下候	同
明治 五年 六月 十日	製綱并帆縫方重立申付	造船局
明治 五年 六月 十日	候事	
明治 五年 十一月	二級月給被下候事	主船寮
明治 五年 十一月十二日	附属申付候事	同
明治 六年 八月 四日	任主船中士長	海軍大丞從五位
		真田庵奉

明治 七年 二月 三日	任主船大工長介	海軍秘書官正六位
明治 七年 二月 三日	同	小森沢長政
明治 九年 三月 二五日	四拾老級加俸被下候事	主船寮
明治 九年 三月 二五日	横須賀造船所出勤申付	海軍省
明治 十年 八月 二二日	任海軍式等工長	海軍大佐從五位
明治 十年 一月 一日	三拾六級加俸被下候事	林清康
明治 十一年 二月 二七日	三拾九給加俸被下	横須賀造船所
明治 十一年 二月 二七日	候事	同
明治 十一年 二月 一日	任海軍式等工長	海軍大書記官正六位
明治 十一年 二月 一日	任海軍式等工長	小森沢長政
明治 十四年 五月 二三日	迅鯨艦工業之為横浜	横須賀造船所
明治 十四年 五月 二三日	出所申付候事	
明治 十五年 九月 二二日	任海軍老等工長	同
明治 十七年 三月 二五日	三拾六級加俸被下候事	同
明治 十九年 三月 二三日	製帆工場長申付候事	同
明治 十九年 四月 二六日	本職を免し製綱工場掛	横須賀鎮守府
明治 十九年 五月 四日	を命ず	
明治 十九年 五月 四日	任海軍四等技手	海軍省
明治 十九年 五月 四日	横須賀造船所勤務を	同
明治 十九年 五月 四日	命ず	
明治 十九年 五月 四日	給日給金老円六拾老銭	同
明治 十九年 五月 四日	式厘	同
明治 十九年 五月 一七日	造船科製工場掛ヲ命ズ	横須賀鎮守府
明治 十九年 六月 五日	給上級俸	同
明治 十九年 六月 五日	非職ヲ命ズ	海軍省

(三崎弘氏所蔵の辞令よりまとめる)

山下岩吉の系図

新兵衛も仁兵衛も共に人名である。



大聖寺過去帳

(文化十年より昭和五年まで)

六月二十六日

良原院観光義然居士

山下岩吉 七十六才



参照

大聖寺過去帳
三崎ユキ
山崎シワ
中谷タケノ
口説

山下岩吉の墓

(右側)

良 大正五年旧六月二十六日 岩吉
賢 明治十八年三月二十六日 長女タカ
長 明治三十一年五月十五日 妻 ミツ

(正面)

良原院観光義然居士
賢妙院花顔貞笑大姉
長生院現光節音大姉

(左側)

神奈川県三浦郡横須賀 長院地マイソ
置候土族
為法眠奉納金拾円当寺 山下岩吉

主要参考文献

- 「瀬戸内海における塩飽海賊史」
- 「幕府オランダ留学生」
- 「薩摩藩英国留学生」
- 「勝海舟」
- 「日本海軍史」
- 「よみがえる幕末の軍艦開陽丸」
- 「勝海舟と日本海軍」 雑誌プレジデント
- 「幕末小笠原島日記」
- 「榎本武揚」
- 「写された幕末」
- 「造艦テクノクラートの草わけ」赤松則良

雑誌 歴史と人物

三崎ユキ様、三崎弘氏より資料の提供、塩飽大学老人会の皆様の口説

関ヶ原近江路を行く

依田フジ子

十月初めに申し込んであった文化財研修旅行の当日になった。寒い頃の夜十時発にはためらわれたが、いざ出かけて見るとさほどにもないので安心する。早目にと指定の役場前に来たのだが、もう大勢乗っておられた。十一の両日は雨の予報だったので、寒がりやで防寒衣を入れた上に雨具を詰め込んだので

一泊旅行にしてはかなりふくらんだ荷物となつてしまった。

多度津からの二十四名は断然女性が多かったが、琴平、満濃、仲南からの方々は殆んど男性なので全体では均衡を保つ人数になった。フェリーでは眠っておかねばと努力したけれどもなかなか寝つかれず輾転するうちに神戸港へ着く。名神高速を一気に駆け抜け、多賀にかかる頃に空は白み初めた。米原から北陸自動車道へ移り、秀吉が最初に城を築いた長浜を通り過ぎて三六五号線に変わる。少し走って

- | | | |
|------------|----------|---------------|
| 真木信夫 | 宮脇書店 | 昭和四十七年十二月十日刊 |
| 宮永孝 | 東京書籍株式会社 | 昭和五十七年三月十五日刊 |
| 犬塚孝明 | 中央公論社 | 昭和五十八年二月十五日刊 |
| 松浦玲 | 中央公論社 | 昭和五十八年二月十五日刊 |
| 外山三郎 | 教育社 | 昭和五十七年六月二十五日刊 |
| 開陽丸発掘調査委員会 | 共同通信社 | 昭和五十三年八月八日刊 |
| 半藤一利 | プレジデント社 | 昭和五十八年八月一日刊 |
| 田中弘之 | 緑地社 | 昭和五十八年九月二十五日刊 |
| 赤木駿介 | 成美堂出版K K | 昭和五十五年十二月十日刊 |
| 石黒敬七 | アソカ書房 | 昭和三十二年四月十五日刊 |
| 内藤初穂 | 中央公論社 | 昭和五十九年三月一日刊 |

Copyright © 1975 by Totsuki Cultural Heritage Association